

第3章

調査協力校の実践

第三章

調査協力校の2年間の取組について紹介します。



多様な児童理解に基づく教職員の相互理解と協働

岩舟町立岩舟小学校

取組のポイント

- 児童の実態把握に努め、取組の方向性と年度の重点目標を明確にして学校全体で取り組んでいます。
- 校内研修にワークショップを取り入れるなどして、各自の実践交流や意見交換を促進し、教職員の相互理解を深めています。
- 個人の優れた発想や豊かな経験を共有して、教職員が指導力を高め合える機会を設けています。

学校の概要



- ・児童数 483 名 ※H24. 5. 1
- ・学級数 17
(普通学級 14、特別支援学級 2、ことばの教室 1)
- ・教職員数 32 名
- ・町の中心部に位置し、校舎南側には国道 50 号線が横断している。佐野藤岡 I C にも近く、交通量の増加とともに保護者の職業は多様化し、地域は農村型から都市型に移行している。
- ・明治 43 年に岩舟尋常高等小学校として開校し、平成 22 年に創立 100 周年を迎えた地域の伝統校である。
- ・平成 22 年「学校応援チーム派遣事業（県教委）」指定校

本校の取組は、「児童一人一人が、学校生活の中で自分の存在を実感し、力を発揮できるようにしたい」という教職員の思いからスタートしている。児童の実態を適切に把握し、教職員が相互理解を深めながら協力して取り組むことができるよう、指導方針や取組の方向性を確認し、児童指導及び学習指導の充実に努めている。取組の柱は、「Q-Uの実施と効果的な活用」「校内研修の充実」である。

Q-Uは児童の実態をより適切に把握するために、平成 23 年度から全学級で実施している。また、校内研修を活用して各自の実践を定期的に交流し、児童や指導方法について共通理解を深めながら、各自の教育実践に生かすようにしている。

校長の明確な学校経営方針と支援的なリーダーシップのもと、学校全体で課題に取り組んでいこうとする教職員の意識が高まり、子どもたちが育っているという手応えを共有する中で、教職員間の連携が生まれている。

平成 23 年度・24 年度 学校課題

居がいのある学級集団をつくる学級経営を目指して

実践内容

1 目指す方向の確認及び課題達成に向けた方策の共有化

学校における教育実践が効果的に行われるためには、教職員一人一人の取組とともに、学校組織として教育活動を改善していくことが重要である。本校では、職員会議や校内研修を活用して、学校課題や重点目標についての共通理解を図っている。

(1) 学校課題の明確化と共有を促す管理職のリーダーシップ

4月の職員会議において、校長が学校経営構想を示し、基本方針や努力の重点等について教職員の共通理解を図っている。特に、以下の点について丁寧に説明している。

○経営方針…教職員相互の信頼関係を基盤にした参画と全教職員の共通理解

○教育課題…児童相互の人間関係の涵養、「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」を味わえる授業の充実

本校児童に「人間関係を築く力」と「確かな学力」を育成することが必要であるということは、多くの教職員が抱いていた課題意識と一致する。また、各教職員が懸命に取り組むだけではうまくいかないという認識もあった。学校経営構想には、「学校経営」と「学年・学級経営」の目標が示され、教育活動における教職員の主体性と連携協力の重要性が明確にされている。校長は、職員会議だけではなく、全校朝会や保護者会においても「学校は、勉強をするところ。共に学び・高め合うことが大切」ということを繰り返し話している。

岩舟小学校 学校経営構想（教育目標と努力の重点） ※一部抜粋

めざす児童像 ①明るいあいさつと返事のできる子 ②自分の考えをはっきり言える子 ③健康でがんばれる子	学校教育目標 ○やさしい子 ○よく考える子 ○たくましい子	めざす学校像 ①優しさとけじめのある学校 ②基礎・基本の定着をめざす学校 ③安心・安全をめざす学校
学校経営 ○学校評価結果や関係者評価の結果を生かし、よりよい教育活動の推進に努める。 ○校内研修の充実を図り、職員が互いに刺激しあい磨きあいながら、確かな指導力の向上を目指す。 ○教職員自ら、協力し合う温かな雰囲気の中で人権感覚を研磨し、豊かな人間性を育む。 ○報告・連絡・相談を徹底し、服務規律の保持に努める。		学年・学級経営 ○児童同士の人間関係に配慮し、全員が毎日楽しく安心して過ごせる、居がいのある学年・学級集団づくりに努める。 ○児童が「学習する楽しさ」「わかる喜び」を味わえる授業の充実に努めると共に、個に応じた学習指導法を工夫して基礎・基本の定着を図る。 ○保護者との連絡を密にし、信頼関係の構築と保持に努める。
学校教育目標 やさしい子 よく考える子 たくましい子	努力の重点 ①児童と教師の信頼関係、児童相互の人間関係の涵養に努める。 ②規範意識を高め、よりよいコミュニケーションが図れるよう全教育活動を通じて道徳教育を推進する。 ①ねらいを明確にした学習指導法を工夫し、「学ぶ楽しさ」「わかる喜び」を味わえる授業の充実に努める。 ②言葉を大切にしつつ、「コミュニケーション力」の育成に努める。 ①規範意識を高め、基本的な生活習慣やチャレンジ精神が身に付くような指導の充実に努める。 ②一斉下校や安全指導・点検を徹底し、事故0を目指す。	

■ 「教職員が学び合い、授業の質を高めることで、児童相互の人間関係と学力形成を図る」という基本方針が示され、管理職は様々な機会を捉えて教職員や保護者に伝えています。学校として目指す方向が明確になったことが、その後の教職員の実践意欲や評価意識につながっています。

(2) 児童の実態を踏まえた学校教育課題（研究主題）の設定

本校では、児童が落ち着いて学習に取り組み、十分に力を発揮できる学級・学校づくりを目指している。研究主題「表現力・コミュニケーション力を育てる指導法の工夫」（平成17年度～）の実践を通して、児童は授業や話し合い活動に意欲的に取り組み、表現力も高まっていると、多くの教職員が感じていた。一方で、児童間のトラブル対処や問題を抱える児童への指導にとどまることなく、互いに認め励まし合う学級づくりの必要性が課題として見えてきた。

そこで、平成22年2月、学校評価の結果も踏まえて、教職員間で話し合い、次年度は学級経営に焦点をあてた学校課題研究を行うという方向性を職員会議で確認した。年度が変わり、校長をはじめ約3分の1の教職員の異動があったが、学級経営は学校生活及び学習指導の基盤であるとの認識から、平成23年度の研究主題を「居がいのある学級集団をつくる学級経営を目指して」に設定した。

研究主題設定のプロセス

（平成22年2月）

- ①学校評価の結果分析
（全体協議及び各分掌での検討）
- ②学習指導部による原案の作成
- ③企画委員会での検討
- ④職員会議での提示・説明

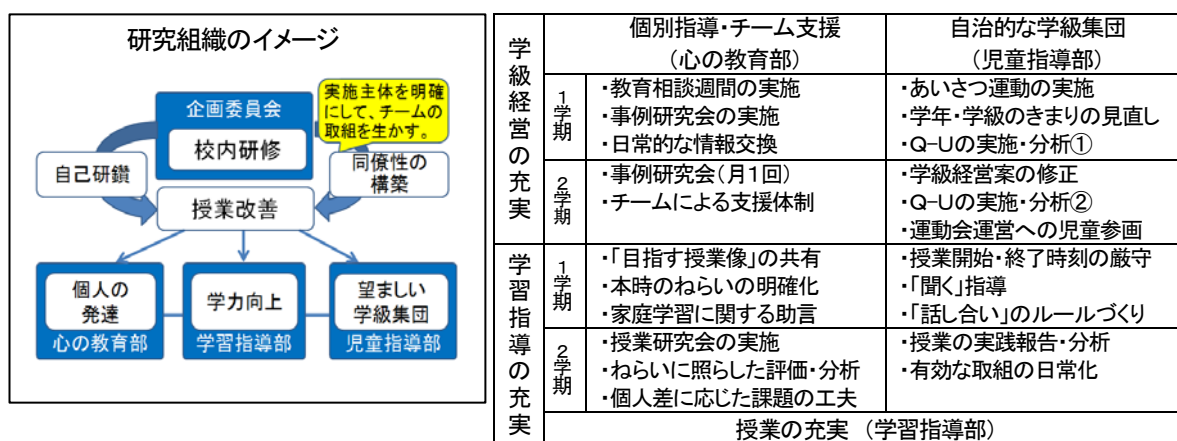
(3) 授業改善の方針及び役割の明確化

研究主題を受けて、「授業改善を通して、望ましい学級集団の育成と学習指導の充実を図る」取組を学校全体で進めていくために、学習指導部が中心になって研究の計画と取組の案を作成した。研究計画の「主題設定の理由」には、研究を進めるに当たっての学習指導主任の考えが次のように書かれている。

教職員のチームワークを大いに発揮し、学校やクラスが抱えている問題点を互いに理解し合いながら、課題解決に向かって具体的な手立てや指導の方向性について考えていきたい。そのためにも、互いに授業参観を積極的に行ったり、参観後の話し合いや職員研修の充実を図ったりして「学校力」を高めていくことが望ましい。

【主な研究内容】

- ・「学校力」についての理解
- ・Q-Uの実施と効果的な活用
- ・「個人カルテ」を活用した事例検討
- ・ワークショップによる職員研修



- 教職員が実践に必要な情報を共有し、協力して力を発揮できるよう、校務分掌を生かした取組の重点を整理して計画を立てています。各分掌の主任が中心になり、自校の教育活動を充実させるための方策について話し合い、学校全体で取り組めるようにしています。

(4) ワークショップ型校内研修による相互理解と目標の共有

教職員一人一人が、自校の課題や目標、指導の重点を意識して取り組むことが、学校として一貫性のある教育実践につながる。そこで、学校の現状把握と目標の共有を目的に、ワークショップを取り入れた校内研修を1学期に実施した。「学校力」についての基本的な理解を図った後、全教職員が低・中・高学年の3班に分かれ、日頃感じていることや児童にもっと伸びてほしい点を出し合い、取組の重点と方策をまとめ発表し合った。また、各班のまとめが書かれた模造紙は、研修後も目標を意識して取り組むことができるよう、校内に掲示することにした。

(ワークショップの手順)

- ①学校課題に照らして、現段階で「できていること」「もっと伸びてほしいこと」を付箋に書いて、模造紙に貼る。
- ②付箋を整理しながら意見交換し、共通する課題（目指す児童の姿）を明確にし、模造紙の中央に書く。
- ③児童のよい面に着目し、さらに伸ばしていくために必要な支援やできることを考えて付箋に書き、整理しながら模造紙に貼る。
- ④各班で話し合ったことを模造紙にまとめて発表する。
- ⑤研修を振り返り、学校の全体的な傾向、各学年の取組の重点等について確認する。

研修後に書かれた振り返りカードからは、多くの教職員が、この研修のよさを感じ、児童への理解や教職員の相互理解が深まったことがうかがえる。中には、この研修方法を「居がいのある学級づくり」に取り入れたいという内容もあった。

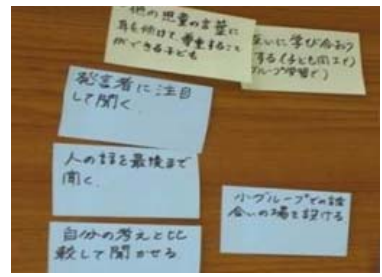
[研修後の教職員の感想]

- ・日頃、職員室等で出し合っている悩みが整理され、改善策や方向性が見えてきました。このような校内研修の機会を効果的に効率的に実施していくことが必要だと実感しました。自由に協議できるこうしたスタイルがよいと思います。
- ・課題や改善点の中で、バラバラしていたものでも書き出して貼ることでつながりがあることが分かりました。何かをよくすれば、他のことにもつながるので、目先のことでなく、その先も見据えて指導をしていきたいと思いました。子どもたちも「～したい」と自分のクラスのことを考えていると思うので、話し合い活動の一つとしてこのワークショップを取り入れたいと思いました。
- ・「思いやり」が中学年ブロックのテーマになりましたが、思いやりを育むためにさらにどんなことをしていっていいかということ普段ほとんど考えたことがありませんでした。ワークショップを通し、具体的に行えそうなことがたくさん見えてきて大変勉強になりました。意識しながら子どもたちに接していきたいと思います。

話し合いの様子

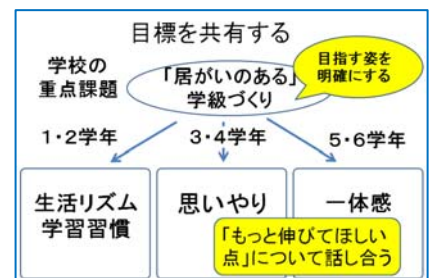
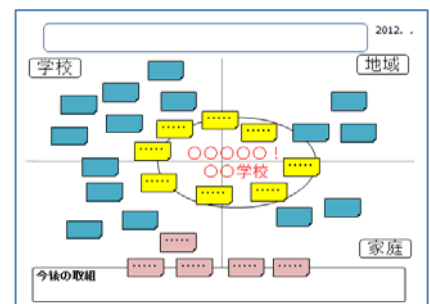


各自の考えや意見を書いた付箋



研修で使った資料

学校課題「 【現状把握】	
よいところ・できていること・もっとよくしたいこと	児童生徒
よいところ・できていること・もっとよくしたいこと	教職員
【改善に向けた方策】	
できそうなこと・やらなければならないこと・本当にしたいこと	



■ 年度途中に研修の場を設けて、児童の様子や指導に関する情報交換を行うことは、学校課題と取組の方向性を確認する上で大変有効です。教職員一人一人が大切に思っていることや望んでいることを出し合う過程で、優先して取り組むべき課題も明確になります。

2 Q-Uの全学級実施と効果的な活用による共通認識の形成

本校では、児童の学校生活や学習の基盤となる「望ましい学級集団づくり」に力を入れている。教職員が連携・協働して児童の成長を促す教育活動を行うために、児童や学級集団の実態把握と校内体制づくりに努めている。

(1) Q-Uの全学級導入と個人カルテの作成

本校では、担任による観察に加えて、平成23年度からQ-Uを全学級で導入し、児童の実態把握に活用している。それまでも、一部の学級ではQ-Uを実施しており、他校で実践経験のある教職員もいたが、学校全体での取組にはなっていなかった。

Q-U導入の背景には、「岩小すべての子が、居がいを感じられる学級・学校にしよう」という教職員の思いがある。前年度の学校評価の結果から、学習指導部が中心になってQ-U導入の目的・方法について教職員で検討し、現校長の方針の下、全学級での実施となった。

導入に当たっては、教職員の理解を深めるための校内研修を複数回行っている。5月に外部講師を招聘し、Q-Uの目的や考え方、実施方法、効果的な活用について学んでから、全学級でQ-Uを実施している。6月には再度講師を招き、校内の2学級を取り上げて、Q-U結果分析と併せて児童指導事例研究会を行った。

その後、11月に2回目のQ-Uを実施し、配慮を要する児童について『個人カルテ』を作成している。学習指導部が様式を示し、学級担任によって『学級生活満足群』の変化や指導の工夫が記述される。事例研究会では、できるだけ多くの教職員が児童理解を深めて支援できるよう、平成23年度は「学級で気になる児童」、24年度は「学級担任が見逃しがちな目立たない児童」に焦点を当てて話し合っている。

[平成23年度 校内研修計画]

- | | |
|-----|--|
| 4月 | 研究計画・組織の提案
学級経営案の立案 |
| 5月 | Q-U実施1回目 |
| 6月 | 講師を招いてのQ-U結果分析
学級経営案の修正
教育相談、個人カルテの記入①
児童指導事例研究会1 |
| 7月 | 学級経営評価・改善 |
| 8月 | Q-U校内事例研究会2
校内研修(実態把握)
授業研究(指導案検討) |
| 9月 | 「SGE」「SST」の実践 |
| 10月 | 校内研究授業(全学級) |
| 11月 | 授業研究(学活、道徳)
Q-U実施2回目 |
| 12月 | 個人カルテの記入②
学級経営評価・改善 |
| 1月 | 児童指導事例研究会3 |
| 2月 | 学校課題研究まとめ |
| 3月 | 次年度の計画 |

(2) 個と学級に関する共通理解の深化

既に行われていた事例研究会にQ-Uが加わり、限定的ではあるが、児童の心理面に関するデータが示されるようになったことで、日常の観察から得られた情報と併せて、よりの確な実態把握ができるようになった。事例研究会を年3回実施し、全教職員が、低・中・高学年に分かれて、児童の状況や支援策等について話し合っている。また、児童指導主任の提案で、平成24年4月から職員会議内に時間を設定して、児童指導に関する情報交換を定例化するなどの工夫もしている。

[研修及び事例研究会後の教職員の感想]

- ・なぜこの子がこの位置にいるのか意外だった。
- ・自分の学級に欠けていることは何か、どんな指導が必要なのか考える機会になった。
- ・教師が自分の個性を生かしながらも、バランスのとれた学級経営を心掛けていくことが大切だと思った。
- ・事例研究会で、Q-Uの結果や日頃の子どもの様子について他の先生方と話すことができ、学級づくりのヒントが得られた。

■ 新たな取組を始める際には、その目的と期待できる効果についての理解が重要になります。本校では、Q-Uの全学級導入に当たって、年度の早い時期に教職員全員が同じ研修を受けています。その後も、児童や学級の様子について定期的に話し合う場を設け、学級経営の改善に生かしたり、教職員の同僚性を高めることに役立てたりしています。

3 教職員の創意を生かした教育実践と全校で行う基本的指導の充実

教職員がそれぞれの役割に応じて、本校児童のよりよい成長のためにできることを考え、提案・実践している。個人の優れた発想や豊かな経験を生かしながら、共に取り組むという、教職員の前向きで主体的な行動が、学校全体の教育力向上につながっている。

(1) アーネストスクール（一人一研究授業）

本校では、一人一研究授業を公開し、授業前・授業後の話し合いを通して授業力の向上に努めている。研修計画では、1学期中に学校課題や指導全般に関する内容を行い、一人一研究授業は9月以降に位置付けている。授業公開は、各自の研究教科で、2月までに行う。特に、道徳の時間と学級活動については、「居がいのある学級づくり」に果たす役割を重視し、平成23・24年度は要請訪問として実施した。

指導案作成に当たっては、学年や教科部会で検討し、できるだけ多くの教職員が授業を見るようにしている。また、授業を参観するだけでなく、児童の様子や指導について気付いたことを感想用紙に書いて授業研究会に臨んでいる。なお、学習指導案には、Q-Uの結果も含めて児童の実態が丁寧に書かれており、学校課題との関連も示されていることから、授業研究会ではそれらの視点から意見が出されることも多い。

授業研究会の様子



(2) 基本的な学習態度・学び方の指導

学級集団の育成と学習指導の充実を図る取組を全校体制で進めるために、学習指導部が中心になり、「岩舟小・学習のきまり」を作成している。これは、本校児童の実態等を踏まえ、「基本的な学習態度や教室環境整備」と「育てたいコミュニケーション力」について整理したもので、平成24年度から全教職員に配布している。明文化したことで、教職員は児童の発達の段階と指導の重点をより意識し、きめ細かな指導を心掛けるようになった。

また、月ごとの「学習めあて」を設定し、児童への意識付けを図っている。月末には、児童に自己評価させるとともに、各学級担任は児童の様子や指導の工夫等を報告している。児童の生活態度や学習習慣により変化が見られ、学年便りや学級懇談会を通して、児童の成長が保護者に伝えられている。

「岩舟小・学習のきまり」 本校の目指す学習の基本について

※項目のみ

○基本的な学習態度

- ・着席、起立、発表するときの姿勢
- ・話の聞き方
- ・ノートの取り方

○各学年で育てたいコミュニケーション力

- ・聞く ・話す ・伝える ・書く

学習のめあて

※一部抜粋

- 4月 大きな声で返事やあいさつをしよう
- 5月 下じきをつかって、ていねいに字を書こう
- 6月 チャイムの合図を守ろう
- 7月 1学期の学習のまとめをしよう

[教職員の振り返り・感想等 ～アンケート用紙から～]

- ・お互いに授業を参観し研究することで、授業に対する意識や授業の質が高まってきたように感じる。
- ・アーネストスクールなどを利用して、教職員が相互に研修する意識が高まった。
- ・職員室で、授業や児童についての話題が増え、悩みなども聴き合っている。
- ・指導案の検討、研究会だけでなく、日頃の学級経営への取組や育てたい子ども像を意識して、よりよく改善しようという気持ちをもって取り組めるようになっている。

■ アーネストスクールは、本校教職員が学び合う場となっています。授業研究会の様子から、授業を見合い、児童の学ぶ姿を語り合う中で、新たな気付きや指導のヒントを得ていることが分かります。また、家庭にも積極的に働きかけ、学校全体で、生活や学習に関する基本的な事項に関する指導と評価を積み重ねていることが、児童の学習に向かう姿勢や基礎学力の定着につながっています。

(3) 児童が主体となる活動の工夫

本校では、学年や学校全体で何かを作り上げる場面を大切にしている。一人一人が役割をもって活動できる場を設定し、その活動中や事後に、助け合ったり、お互いのよい所や頑張っていることを認め合ったりする活動を入れることで、自己有用感や達成感をもたせたいと考えている。

8月の校内研修で、児童にもっと伸びてほしい点を話し合った際、高学年ブロックの共通認識は、「子どもたちが本気になって取り組み、お互いを高め合う中で、達成感や一体感を感じられるような経験をさせたい」というものだった。その後、児童に役割をもたせ、互いに協力したり、それぞれの特性を生かして活動したりする機会を設定し、特に、人間関係づくりや役割遂行を通した指導を充実させてきた。学校行事や児童会活動もその一環として位置付け、実施してきた。

運動会では、毎年、児童運営委員会が中心になり、児童が計画や準備、当日の運営等に積極的に取り組み、意欲的に活動している。プログラムには、5・6年生合同種目があり、中でも「ソーラン節」は児童主体で練習が行われ、5年生ができるようになるまで6年生が責任をもって教えるという伝統がある。運動会当日には、グループリーダーを務める6年生が最前列で踊り、5・6年生全員による、息の合った力強い演技を披露している。

そして、平成23年度から新たに組体操が加わった。前任校でも組体操の指導をしてきた現5年担任と体育主任が中心となり、高学年担当の教職員が協力して指導に当たった。個人の頑張りだけでなく、仲間を信頼し気持ちと力を合わせて真剣に取り組まなければ怪我につながりかねない難しい技も含まれていたが、子どもたちは一生懸命に演技し、見事にやり遂げていた。それは、保護者、地域住民、教職員が共に、子どもの成長を喜び、実感した場でもあった。

運動会をはじめ、地区合同の学習発表会、音楽祭、学校開放日など、本校の学校行事は、学校、家庭、地域をつなぐ重要な役割を果たしている。学校評価の資料となる児童アンケートの結果を見ると、「行事のときに、家の人や近所の人たちが学校によく来てくれますか」という項目に「はい（あてはまる）」と回答した児童の割合が、2年前に比べて7%増えている。また、「学校の予定や連絡はよくわかり、家の人にきちんと伝えていきますか」は10%、「安全に登校できていますか」は8%、「学習や運動は、めあてを決めて一生懸命取り組んでいますか」は3%、それぞれ、4段階評価で「4」と回答した児童の割合が増えている。このことから、「家族や地域の人たちが、学校での自分たちの頑張りも見てくれている」と感じている児童が増えているとともに、児童の主体的な態度も育っていることがうかがえる。

学級活動（人間関係作り）



運動会の様子



- 少し高い目標をもたせ、児童が真剣に取り組むことや協力することの大切さを学び、達成感や自信を得られるような体験をさせていることは、組体操に挑戦した5、6年生はもちろんのこと、その姿を見ていた下級生にとっても有意義な教育活動となっています。自分たちも6年生になったら、あなりたいというモデルが積み重ねられており、こうした伝統や文化をもつことが学校の財産になっています。

実践の手応え

[教職員の感想等 ～アンケート用紙から～]

- ・どのクラスも落ち着いて取り組み、目標に向かって一生懸命がんばろうとする姿が見られる。ベテラン、中堅、若手の教師が、それぞれ持ち味を発揮して、学校課題に対しても同じベクトルで取り組んでいる。
- ・実態を正しく捉え、それにどう対応していくべきか、共通理解を図りながら、個ではなく、全体で対応していこうとする意識が高まった。
- ・「居がいいのある学級づくり」に向けて、研修や授業研究、Q-Uの結果を基に、学級経営に力を入れてきた。特に個に応じた手立てを考え、実践してきた。
- ・目標を共有化しているので、常に授業の在り方を考えるようになった。アーネストスクールなどに刺激を受けて、より質の高い授業をしたいという気持ちになった。
- ・管理職が親身になって話を聞いてくれる。職員のチームワークがよかった。
- ・2年目で心に少し余裕ができたので、みんなの役に立てるようにと考えて仕事に取り組めた。同僚性の向上が学校力の向上につながると考えている。
- ・昨年まではクラスでの悩みなどで保健室に来る児童もいたが、本年度はそのようなこともない。職員が児童一人一人に目を向けて接していることで、「居がいいのある学級」となり、児童も楽しい学校生活が送れているのだと思う。
- ・Q-Uで学級生活満足群への移行が見られた。みんなのためにと考えて行動する児童が増えた。
- ・自分たちでよりよい学級をつくらうとする意欲が高まってきている。

[取組の成果及び児童の変化を示すデータ]

[Q-Uの結果] (平成24年10月実施)

- ・学級生活について、「学級生活満足群」の割合が、すべての学年で全国平均を上回っている。
- ・学校生活の意欲も、全国平均より良好な値である。全国平均に比べて、「友達関係」と「学級の雰囲気」は有意に上回り、「学習意欲」はほぼ同様の値である。

[児童アンケートの結果] (平成24年11月実施)

- ・19項目中17項目について、肯定的回答の割合が高くなっている。(平成22年度との比較)
- ・「学校は楽しいですか」について「とても楽しい」と回答した児童の割合は73%(平成22年度比較+8%)

[保護者の声]

- ・二人の子どもは学校から帰ると、「学校楽しかったよ。」と笑顔でその日にあったことを詳しく教えてくれます。生き生きと楽しく子どもが学校に通うことができるのも、先生方が普段から細かく気配り目配りをしてくださり、子どものよさを認め、励ましてくださるおかげです。心から感謝しています。
- ・子どものために分かりやすいプリントを作成してくださったり、日々の授業を工夫してくださったりしているおかげで、子どもたちは「もっと頑張ろう」という気持ちになり、やる気ができています。

学校の取組から

小学校では、1年生と6年生では児童の成長の状況は大きく異なります。本校では、学校全体として目指す方向性について共通認識をもち、取組については学年の差を踏まえた計画を立てて実践に取り組んでいます。どんな学校にしたいのか、子どもたちに必要なことは何か、そのために何ができるのか、校内研修や事例研究会において、管理職と教職員が一緒に考え、意見を交わす様子や感想から、教職員間の相互理解や課題の共有が進んでいることが見て取れます。

集団や組織の中で自分が認められ、課題意識やアイデアをもって取り組むことで何かを実現できるという思いを抱けることは、児童だけでなく教職員にとっても重要です。校長は、経営方針の第一に「教職員相互の信頼関係を基盤にした参画と全教職員の共通理解」を掲げ、一人一人の教職員が力を発揮し、児童の成長のために最善を尽くすことを大切にしています。学校としての軸がぶれないよう舵取りをしながら、各教職員の個性と取組を認めて指導力向上につなげている管理職の存在は、教職員の意欲と創造性を高め、本校の教育実践をより確かなものにしていきます。

児童の事実に基づいた教職員の学び合いを核とした学校経営

宇都宮市立陽東小学校

取組のポイント

- 事前に指導案検討を行って取り組む全職員による研究授業と授業研究会並びに、自由に参観する一人一研究授業を実施し、学校課題の解決に努めながら児童のよさを生かし育てています。
- 教職員一人一人が、学校課題を自分の課題として捉え、ミドルリーダーを中心に日常的に授業について相談し合い学び合う体制が整っています。
- 「学習に関するアンケート」や「学習内容定着度調査」の活用により、児童の育ちを確認し、次のステップにつなげています。

学校の概要



- ・児童数 671 名 ※H24. 5. 1
- ・学級数 24
(普通学級 19 特別支援学級 3 言語通級学級 2)
- ・職員数 42 名
- ・近年、学区内に大型ショッピングセンターや娯楽施設、住宅が建設され、人口が増加している。
- ・「やる気」と「根気」と「思いやり」をもつ心豊かな児童を育む教育を目指して、教職員が一丸となり意欲的に教育活動に当たっている。
- ・平成 22 年度より、宇都宮市教育センターの「校内研修サポート事業」の研究協力校となっている。

本校では、一人一人の児童を集団の中で認め生かす指導を心がけ、深い学びのある授業を積み重ねていくことを目指している。新学習指導要領の「言語活動の充実」を受けて、自分の考えを伝えようとする「言葉の力」と相手の考えを理解しようとするための「聴く力」を丁寧な育て、集団の中で互いに伸びていこうとする児童の育成に努めている。

平成 23 年度までの取組から、互いの発言をよく聴く児童に育ってきている。そのため、教職員は大きな声を出さずに指導ができ、しっとりとした心地よい雰囲気の中で授業が展開されるようになってきた。

平成 24 年度の努力点は大きく二つある。その一つは「つなぐ」ことである。「つなぐ」とは、児童同士の意見をつなぐ、教材と児童をつなぐ、過去の学びとつなぐことである。もう一つは、児童が夢中になって取り組む課題の設定について研究することである。

本校では、学校課題を受けて学年テーマを決め、さらに個人テーマを決めて研究している。このことにより、教職員が学校課題を自分の課題として捉え、日々の授業においても、学校課題を意識して授業に臨むことができている。

平成 23 年度・24 年度 学校課題

一人一人の子どもを認め、生かす授業の創造
～学びのある授業をめざして～

実践内容

1 授業研究会の活性化と協議の深化

授業の質を高めるには、学校課題を自分の課題として捉えることが大切である。本校では、学校課題を受け個人が課題を設定して授業研究会に臨むことで、自身の授業を振り返り、授業の質の向上につなげている。

(1) 多忙感が充実感に変わる授業研究会

本校は、宇都宮市教育センターに希望して、平成22年度の「校内研修サポート事業*」の研究協力校となった。校長には「熱意をもって教育活動に当たっている教職員の力をさらに伸ばしたい。児童には、互いを尊重し学び合うことを通して成長してほしい。」という強い思いがあった。

当初は、多忙になることを危惧する教職員の声もあったが、授業研究会の回を重ねるにしたがい、短時間で中身の濃い話し合いができるようになり、手応えを感じる教職員が増え、意欲が高まっていった。各教員が事前の指導案検討会や授業研究会等の研修で学んだことを生かして授業改善に取り組んだ結果、児童の変容が見られ授業力が向上しているという実感をもっている。

また、教職員は外部講師である大学の教授による指導助言への期待を寄せている。限られた時間の中でより多くの指導を受けられるように、特別日課を組み午前中に授業を公開し、授業者は昼休み中に指導を受け、15時から授業研究会を行っている。

(＊授業研究会の改善を図ろうとする学校に、授業研究の分野に造詣が深い大学教員を原則として2年間継続的に派遣する事業)

(2) 授業の見方の共通理解

教職員がじっくり話し合う時間を取りにくくなっている現状の中で、本校では、「授業研究会は、教育について本気で語り合える時間である」と捉えている。

授業研究会の充実を図るために、学校課題推進計画の中に研究の方法として次のような「授業を見るポイント」が示されている。

☆授業を見るポイント (抜粋)

◎学年テーマと照らして、また、個人テーマと照らして

- (1) その授業における子ども一人一人の学びの事実に対応していたか。
- (2) 教師は話し手の本当に言いたいことを考えながらじっくり聴き、子ども一人一人のつぶやきや戸惑いを受け止めていたか。
～中略～
- (5) 援助を必要としている子どもに適切に関わっていたか。
- (6) 課題に対して一人一人が自分の考えをもち夢中で取り組んでいたか。
- (7) その子の発言やつぶやきは題材・テキストや資料のどことつながって発せられているのか。～中略～
- (9) 他の子のどの発言とつながっているのか。

(3) 授業実践及び授業研究会(国語 第2学年 「お手紙」平成24年6月20日)

◇個人テーマ

子どもの言葉を聴き、子ども同士をつないで学び合いを感じさせる授業

◇授業の様子

児童は一つ一つの会話から主人公の心情を丁寧に読み取り、自分の思いを表現していた。授業者は、柔らかな声で問いかけ、児童の発言を受け止めていた。児童は、友達の発言に耳を傾け、それを受けて言葉を紡ぎ出していた。多くの発言を経て、再び音読をしたときには、がまぐんのもらした感嘆の「ああ」に児童の思いが凝縮され、教室が感動に包まれた。導入で行った音読とは、息づかい、声の調子、語感などが明らかに変容しており、意見を交流したことが心情を深く読み取ることにつながっていた。



授業の様子

◇「学びの集い」の様子（本校では、授業研究会を「学びの集い」と称している。）

協議の焦点化を図るために授業者から次の観点が示された。これらの観点を中心に、地域学校園*の教職員も参加してワークショップ型授業研究会が実施された。

- ・テキストや友達の発言から主人公の様子や気持ちを読み取ることができたか。
- ・友達と考えを交流することで、学び合う楽しさを感じていたか。

（*地域学校園は、中学校とその校区にある複数の小学校で構成されている。小中学生の学校生活適応と学力保障を目指して、小中一貫教育が行われている。）

◇参観者の振り返り

本校では、授業者へのメッセージと自分の授業を振り返るための「参観カード」を活用している。この授業には、次のような意見が寄せられた。（○は、他校からの参観者による）

〔これからの授業に生かしたいこと〕より

- ・子どもたちが、一つ一つの言葉を大切に、どっぴりお話の世界に入っていたのが、すばらしいと思いました。
 - ・子ども一人一人の発言をしっかり受け止め、補足するなどして生かしていく姿がすばらしいと思いました。このような授業ができるようにしたいと思います。
- どの子も真剣に読みを深め、学ぶことを楽しんでいる様子が見られました。これだけ読める子どもたちですから、「気持ちが変わったのはどのせりふから？」という発問をし、せりふを選ばせ、その理由を述べさせていくことで、ダイナミックな展開もできるのではないかと思います。

各班の発表の様子



- 協議を深めるためには、本校のように授業の見方や一回一回の授業研究会のねらいを事前に示しておくことや、各教職員が学校課題を自分の課題と捉えて授業研究会に臨むことが大切です。
- また、地域の小中学校の教職員にも授業を公開して授業研究会で意見交換をすることは、互いの教育活動の理解や学びの広がりという点で効果的です。

2 教職員が主体的に取り組む一人一授業

本校では、「校内研修サポート事業」として年間4回の研究授業と、一人一授業*を行うことにより、授業力の向上を図っている。

一人一授業は個人の取組に任せており、指導案検討の時間は位置付けられていない。それでも、ほとんどの授業者が、学年や実施教科を専門とする同僚に相談して教材研究を行うなど、教職員が日常的に学び合う土壌ができています。

（*全教職員が年間に一回以上の研究授業をすることになっている。このことを、「一人一授業」と称している。）

(1) 一人一授業の実施の仕方

一人一授業と授業研究会のもち方について、学校課題推進計画に次のように示されている。

☆一人一授業・授業研究会の持ち方について（抜粋）

- ・個人研究を出発点として、学年を基本とした日常的な授業の発展を目指す。
- ・指導案は略案とする。（形式は別紙参照）
- ・学年で見せ合うことを原則とするが、授業の日時は全職員に伝え、だれもが自由に気軽に参観できるようにする。 ～中略～
- ・授業研究会では指導案の検討ではなく、授業後の話合いに重点を置く。特に「児童の学びの事実」について授業者の思いを受けて自由に語り合う場となるようにし、教師も学び合いを通して指導力・授業力の向上を目指す。

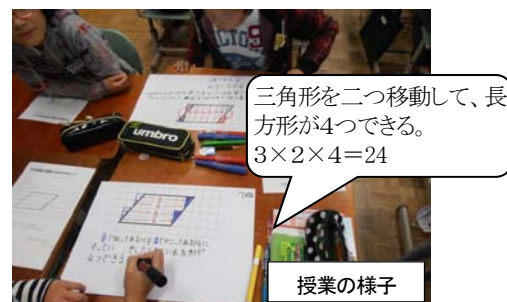
(2) 授業実践及び授業研究会（算数 第5学年「四角形や三角形の面積」平成24年11月16日）

◇個人テーマ

自分の考えと友達のことを比較し、筋道を立てながら考えを表現することのできる児童の育成

◇授業の様子

方眼用紙に描かれた平行四辺形を用いて、面積の求め方を考える授業である。個人で考えをまとめてから、班で互いの考え方を伝え合った。全体発表の場面では、平行四辺形の切り方や移動させた後の方眼の数え方について何通りもの方法が出されていた。児童は、それぞれの考えを比較しながら聴いており、「児童同士をつなぐ」という今年度の課題が達成されつつある。



◇授業研究会の様子

授業者が協議してほしい点を伝え、それを踏まえて話し合いが進められた。ワークシートを見ながら、児童の考えに寄り添って丁寧に解釈し、一人一人の思考の流れを分析していた。特に班での話し合いの目的や、個人の生かし方という点で活発な協議がなされていた。



授業研究会後に、一人一授業についてインタビューをした。

終始、笑顔が溢れている。

一人一授業終了後のインタビューより

Q 一人一授業のよさは？

- A 状況に応じて、授業の一部を見に行くことも可能である。自由な雰囲気がよい。
 A 忙しいけれど、見たいから参加する。例えば、〇〇先生の指導の技を見る、導入をどのように行うか見る、児童の話し合いの様子を見る、など、テーマを決めて参観している。
 A 授業を見れば必ず、参考になることがある。

Q 研究会「学びの集い」に参加できない場合は？

- A ワークシートに授業の感想や労いの言葉を書いて渡し、後日、集いに参加した人に様子を聞く。

本校における授業力向上の二つの取組を紹介してきたが、授業研究会の活性化と協議の深化への工夫を以下のように整理することができる。

【本校の活性化及び深化への取組】

○授業者の思いに沿って肯定的に見る。

よい点をたくさん褒める。児童の学びの様子を丁寧に見て、思考の流れや背景を想像しながら話し合う。

○学校課題に基づいて取り組み、各自の課題意識がつながっている。

学校課題の解決を意識して授業を仕組んで公開すると、課題を意識して参観し、目標の達成度を見るようになる。

自分の授業や自分の課題の達成度も振り返り、課題を更新しながら授業力を高めることができる。

○授業研究会が毎回、新鮮で、研究会がスパイラル状に高まっていく実感がある。

一つの手法にとらわれずに実施している。研究会の雰囲気や参加者の満足度、発言状況の観察、「参観カード」の記載事項などをもとに、教務主任と学習指導主任を中心に、次の研究会の工夫改善を行う。

○向上しようとする意欲が高く、積極的に話し合っている。

児童を伸ばすためにより質の高い授業づくりを目指している。そのために、日々の授業でも、授業の構想や準備物などについて積極的に相談し、話し合っている。

■ 日常的に学び合う雰囲気や授業研究会への期待感があり、忙しい中でも教職員がモチベーションを高く保っています。授業研究会の充実のために、ミドルリーダーが前回の授業や授業研究会の課題を踏まえ、参加人数や目的によって協議の仕方を工夫しています。各教職員が授業で学習課題と児童の問題意識を「つなぐ」ことを目指しており、授業研究会でも既習事項と本時の関わりや、児童の思考の過程などについて話題にしており、協議が深まっています。

3 ミドルリーダーの効果的な働きかけ

校長は、「授業づくりも授業研究も、子どもに視点をあてて考えてほしい。すると必ず、学級づくりの大切さが見えてくるはずである。授業づくりも学級づくりも根本は、一人一人の子どもを大切にすることである。コミュニケーションを取りながら、より高め合う学級づくりをしてほしい。」という思いをもっていた。

研究主任は、学習指導や校内研修に対する校長の考えをよく聴き、職員会議や研修の場で校長が学校課題に対する思いを話す時間を設けるなど、教職員が同じ方向に向かって取り組めるように心掛けた。

平成23年度末には、校内研修で学校課題に関する成果と課題について協議する機会を設定し、24年度の重点目標を決めた。このことにより、学校課題を解決するための教職員の参画意識を高めている。

また、教職員が日常的に学び合える雰囲気づくりや、授業研究会の充実のために様々な働きかけを行ってきた。

(1) 教職員の振り返りを生かした次なる一手

授業の参観者は、右図のような項目で「学びの集い」の振り返りを行っている。研究主任が「参観カード」をコピーして授業者に渡し、原本は本人に返却する。授業者にとっては、新たな気づきを得たり、労いの言葉に励まされたりして、意欲の向上につながっている。参観者は、返却されたカードを蓄積し後で読み返すなどして、学びの跡を振り返るのに役立てている。

研究主任は、研修の度に「次なる一手」を打っている。具体的には、成果と課題を整理し研修のもち方について振り返り、次の研修の企画に生かしている。カードに書かれた改善のアイデアについては、数名の教員に実施可能かどうかを相談してから、全員に投げかけるようにしている。

(2) 新しいリーダーの育成と情報の提供

平成24年度には研究主任が教務主任となり、研修の運営をサポートしている。学級担任をもつ研究主任の負担を考慮し、研究主任に任せること、共に考え取り組むこと、自ら行うことを明確にしている。本年度は、全体により目が行き届く立場となり、地域学校園の学校や関係機関との連携も密にしながら、校内研修の活性化に努めている。

外部の研修で学んだことを伝えるなど、教職員への情報提供も積極的に行っている。右上の資料は、本調査研究の委員会で指導者の講話の内容をまとめて配布したものである。

「参観カード」

- 1…
 - 2…
 - 3 自由にメッセージを書いてください。
 - 4 この授業を通して学んだこと、これからの自分の授業に生かしたいことは…
- 3と4は、毎回、同じ項目。授業者にとって励みになっている。

調査委員会の報告

栃木の学校力の向上に関する調査研究会より 2012/11/12

筑波大教授 浜田博文先生のご指導より

- ① ・小中一貫教育は、お互いの学校の「学んでいる内容」だけでなく、お互いの学校が「やっていること」を分かち合うことが大切。隔っていった子がその後どうなっていくのかを長期的に教育するという視点をもつこと。
長期的プロセスを視野に入れて、今、自分たちがやることを考える。
・「学校力」というのは、一つの学校にとどまることではない。一人一人の子どもにとってはそれぞれの学校が一つの進路点に過ぎない。
だから、それぞれの学校の「つながり」を考えていくことが大切。
・学年、教科など先生たちの縦・横・なめの関係づくり。

- ② ・子どもは集団の中で、「働ける力」を持っている。自分より高いレベルの集団に入ることに上って、もっと力を伸ばそうとする。自分自身が、「こうなりたい」「これを知りたい」と思うことが大切。
お互いが良い目標を共有するという思いを持って「授業」。



保護者向け通信

■ ミドルリーダーは、学校における教育活動の推進役として、全教職員による課題の共有、実践の方向性の提示、意見の集約、情報提供などを行い、教職員の意欲の持続と授業力の向上に貢献しています。また、同僚に積極的に声をかけるなど、日常的に相談し学び合う体制づくりに努め、組織の活性化にも寄与しています。

4 児童の育ちを確認する調査

児童の変容を適切に把握し取組の効果を検証するためには、教師の観察や児童の感想だけでなく、客観的なデータを用いることも有効である。本校では、学ぶ意欲を測定するための「学習に関するアンケート」と、「宇都宮市学習内容定着度調査」を活用している。

(1) 「学習に関するアンケート」（当センターが平成22年に開発した、学ぶ意欲を測定する質問紙）

第3学年以上の児童を対象に、6月と11月に実施した。

〔県の平均値と本校児童の比較〕

- ・全体的に、県の平均値よりも高い傾向にある。
- ・全ての学年で平均値を上回ったのは、「有能さへの欲求」「向社会的欲求」「協同学習」「充実感」に関する質問項目である。
- ・調査対象学年のうち3つ以上の学年が平均値を上回った項目は「安心して学べる環境」「挑戦行動」「深い思考」である。

〔6月と11月の比較〕

- ・全ての学年で「協同学習」「充実感」が向上した。

この結果から、児童同士の学び合いがうまくいっているので、「協同学習」「安心して学べる環境」の肯定的な回答が多いのではないかと考えられる。また、一般的には伸ばしにくい要素である「挑戦行動」「深い思考」が高いのは、本校の学校課題解決の具体策として「児童が夢中になる課題の設定」について取り組んだことと関係があるのではないかと考えられる。

【参考】「学習に関するアンケート」で本校の数値が高かった質問項目

〔安心して学べる環境〕授業でわからないことがあると、先生に聞くことができる。先生は学習のことについてほめてくれる。

学校では、落ち着いて学習している。クラスは発言しやすい雰囲気である。

〔有能さへの欲求〕自分も持っている能力を十分に発揮したい。もっとかしこくなりたい。

〔向社会的欲求〕社会のために役立つような人間になりたい。思いやりのある人になりたい。

〔協同学習〕授業では友達と協力して学ぶことも多い。授業では友達に教えたり、教わったりすること多い。

〔挑戦行動〕今までよりも、難しい問題に取り組むことが多い。むずかしい問題にであうとやる気がでる。

〔深い思考〕もっとうまい解き方や別の考え方はないかと考える。授業では友達と話すことで、より深く考えることができる。

〔充実感〕毎日、明るく元気に生活している。毎日の生活が充実していると感じている。

(2) 「宇都宮市学習内容定着度調査」の児童質問紙より

毎年12月に宇都宮市が実施している学習内容定着度調査の「生活に関する意識調査」の結果の一部を以下に示す。下表は、平成22年度と23年度を比較して示している。

Q「先生や友達の話、最後まできちんと聞いていますか。」（肯定的回答の割合％）

学年(23年度時)	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
23年度 ↑	95.1	92.9	94.4	98.2	93.1	92.1
22年度		84.8	88.2	93.9	92.2	92.8
差		+8.1	+6.2	+4.3	+0.9	-0.7

表の見方

児童の2年間の変容を比較している。例えば、23年度の第2学年は、92.9%である。この学年の児童が22年度時には、第1学年であり、1学年のデータ84.8%を併記している。

平成22年度に比べて23年度は、肯定的な回答の割合がどの学年も伸びている。この結果から、学び合いを重視していることが、話を聞く態度がよくなっていることの要因の一つであると考えられる。

■ 調査結果と研究成果の因果関係は明確ではないが、学校課題として重点的に取り組んできた内容に関わる項目に伸びが見られることは、取組の成果を実感する材料となります。授業研究会等で児童の変容を丁寧にみることに加えて、諸調査を活用して取組の効果を検証することによって、成果と課題が明らかになり学校力の向上につながると考えられます。

5 教職員の意識や取組の状況を確認する評価材料

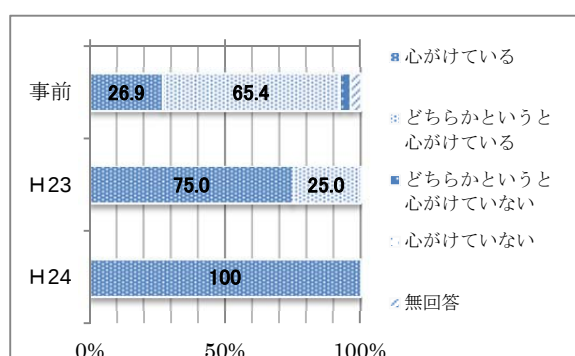
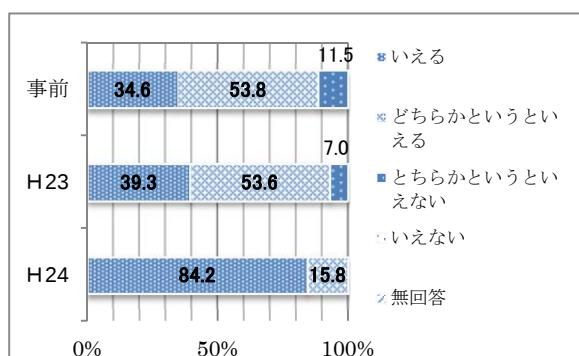
本校では、教職員の取組について、校内研修に対する教職員の意識調査を実施するとともに、学校評価書進行管理表を作成し定期的に評価している。

(1) 校内研修に関する教職員の意識調査

平成22年度から3年間、授業力の向上と学力の向上を目指して取り組んできた成果の評価材料の一つとして、教職員の意識調査を行った。（宇都宮市教育センター「校内研修サポート事業」アンケートより）

Q「職員室で子どもの話題などを媒介に、互いの授業の話題がよく出るような雰囲気である。」

Q「授業者が、自らの職能の発達にプラスになったと実感できるような研究協議になるよう心がけている。」



調査の結果から、3年間で授業を話題としたコミュニケーションが活発になり、日常的な学び合いが行われるようになったこと、一人一人が互いに高め合える場となるように授業研究会に臨んでいることが分かる。それぞれの教職員がプラスになったと感じられるように、教職員のキャリアに応じてアドバイスをし合っている。

(2) 学校評価書進行管理表

全市共通の学校評価を自校化し、重点を置いて取り組んでいることに焦点を当てて評価している。副校長の発案で学校評価書進行管理表を作成し、2か月ごとに成果と課題を整理し、課題についてはいつまでに誰が何を行うかを明確にしている。進行状況の確認に重きを置き、簡単なメモ書き程度とし、表を作成することが加重負担にならないように配慮している。

評価項目	主な具体的な取組	担当	具体的な手立て (いつまでに誰が何を)	7・8月成果、課題と 今後の手立て	9・10月成果、課題と 今後の手立て
学校と家庭・地域・企業等との連携	①児童が人と関わりながら、体験的に学ぶ機会を充実させるため、保護者や企業、地域団体等の協力を得た授業を実施する。 ②は略	〇〇 □□	・生活科で保護者の協力を得た授業を行う。(1年 昔の遊び、2年 町探検) ・各学年で企業、地域団体等の協力を得た授業を行う。	・6月には2年生の町探検で地域の協力を得て、学習ができた。 ・各学年とも企業と調整中。計画通り進められている。	・9月は5年生が〇〇技研の協力を得て親子ふれあいを実施した。
学校全体で、教職員一人一人の指導力向上に努めている	①同僚性を構築し、指導力の向上を図るため、普段から教職員同士が授業を見せ合う機会を設けるとともに、すべての教員が年間1回以上研究授業を行い、「学びのたより」を発行し、授業の様子を保護者に知らせる。	〇〇 □□	・一人一授業公開と学びの集いの実施、(7月、12月、不定期) ・サポート事業(年4回)実施後などに「学びのたより」を発行し、授業の様子や研修の様子を保護者に知らせる。	予定通りに授業公開が実施されている、本年度は地域学校園の先生方の参加もありさらに充実させたい。「学びのたより」も適宜発行されている。一人一授業の公開が後にずれ込まないよう声をかけていきたい。	・予定通りに授業公開が実施されている。 ・一人一授業の公開についても、年内に全職員の授業が計画されている。

■ 教職員の意識調査から、この3年間の教職員の意欲の高まりと学校組織の活性化が明らかになりました。このように成果が明確になることは、更なる意欲の高まりにつながり、「学校力」の向上の原動力となると考えられます。また、短い期間での点検を行うことで、年度末の評価がより信頼性の高いものになり、学校評価の形骸化を防ぐことにも役立ちます。

実践の手応え

[教職員の感想等～アンケート用紙から～]

- ・授業での表情のおだやかさ、真剣さや友達と助け合って学んでいこうという態度が多く、多くの学級で見られるようになったと思います。
- ・「子どもを見る」ということが少しずつ分かってきたかなと思います。教職員の取り組みについては、授業研究会などで、子どもの姿を楽しく語り合う雰囲気が一層強まり、和やかさが増したように思います。
- ・いろいろな問題に直面したとき、先生方がとても親身になって相談にのってくださったり、声をかけてくださったりして、とても温かさを感じます。一人では無理でもチームだからやっていけるよさがあると思います。
- ・一人一授業を始めとする校内研修の機会が多く、自身の意識や指導技術を高めるために大変有効です。
- ・陽東小の学び合いとは、どのようなことをいうのか、研修で考え自分なりに工夫しながら取り組んできました。
- ・児童と共に考え児童と共に授業をつくっていくという意識が生まれてきた。児童の姿から学びを考えるようになった。
- ・それぞれの先生方の思いや考えなどのベクトルが同じ方向に向いて進んでいるような感じがします。
- ・個人個人の発想を大切にしながら、アドバイスし合える職員のつながりがあることがすばらしい。

[保護者・児童による評価より] (平成24年12月実施)

数値は肯定的回答の割合を、()内は平成23年度との比較を示す。

○授業中に進んで話し合うなど、積極的に学習している

児童 91.8% (+5.4%) 保護者 87.3% (+9.0%)

○授業中に先生や友達の話聞くなど、落ち着いて学習している

児童 89.5% (+4.1%) 保護者 85.2% (+6.9%)

学校の取組から

教職員一人一人が学校課題を踏まえて自分の課題を明確にし、研修の中で児童の成長を確認するなど、適切な目標を掲げて取り組んでいます。児童の学びの事実を丁寧に考察し事実に基づいて振り返り、改善していく仕組みがあることが、児童の成長と教師力の向上につながっていると考えられます。

教職員一人一人が、授業研究会を子どもの育ちを確認する場、同僚のよさに学び互いを高め合う場、教育について深く考える場と捉え、向上心をもって取り組んでいます。

また、「児童の学力を伸ばす」「協議を深める」「授業力を向上させる」などの視点で、ミドルリーダーが中心となり、協議のテーマを明確に示し協議の仕方を工夫するなどして充実を図っています。そのため、毎回の研修が新鮮でつながりのあるものとなっています。このように、長期的な目標を見据えながら、短期間に評価し改善を加え、自校にあった研修のスタイルを確立しています。

さらに、若手教職員はベテラン教職員に助言してもらい、ベテラン教職員は若手教職員からアイデアや活力を得るなど、日々、教職員が学び合い成長し続けています。そのため、組織が活性化され教職員同士のコミュニケーションが活発です。

本校は進むべき方向性を共有しながら、その中で教職員の個性が発揮された活力のある学校組織であるといえます。

授業研究会を中心とした校内体制づくり

～生徒一人一人を全職員で育てるために～

鹿沼市立加蘇中学校

取組のポイント

- ワークショップ型授業研究会を、6年前から継続して行い、改善を加えながら授業力向上につなげています。
- 生徒一人一人を育てる教育を、教職員が一丸となって実践しています。
- 教職員対象の「校長室だより」の発行など、管理職による組織力向上に向けた試みが行われています。

学校の概要



- ・生徒数 43 名 ※H24. 5. 1
- ・学級数 3
(普通学級 3)
- ・教職員数 15 名
- ・保護者、地域共に学校教育への関心は高く、学校と共に子どもたちを育てるという雰囲気満ちている。
- ・全員参加の開かれた学校経営が行われており、一人一人の生徒を大切にする教育を実践している。

本校では、「学校力」向上の重要な要素の一つを、「教師の『授業力』『指導力』を高めること」と捉え、組織的に校内授業研究会を行っている。「生徒を見る目」を培うことをねらいとし、授業中の生徒たちの様子や学習状況に気付くことにより、自らの授業や生徒指導に様々な手立てを講じることへとつなげている。

授業づくりの視点（「楽しい授業」「分かりやすい授業」「やる気がおこる授業」）を示し、共通した基盤で授業の内容を話題とし、成果の共有のしやすさを求めている。また、協働の視点から、授業研究会を、参観授業を行ったクラス生徒の学習状況について伸ばしたい点、改善したい点を把握する機会と位置付け、当該学級、生徒を全教職員で育てる手立ての共有を目指している。一人一人の生徒を、そしてその「学び」を育てることを大切にする、よりよい授業を行うための授業力向上に学校全体で取り組んでいる。

平成 23 年度・24 年度 学校課題

学校の教育力を高めるための、校内研修を核とした体制作りと教育活動の展開
～授業力の向上を中心として～

実践内容

1 ワークショップ型授業研究会を活用した生徒理解・手立ての共有

6年前から、全員が年に1回以上研究授業（一人一授業）を実施し、ワークショップ型授業研究会を行っている。生徒の様子や授業のねらいの達成などを付箋に記入して話し合い、全教職員で生徒を育てるための生徒理解の場、手立ての共有の場としている。授業研究会では、生徒の授業中の様子や日常生活の様子、授業展開などについて活発な意見の交換がなされ、そのような中で出される授業者への改善意見等も素直に受け入れられる雰囲気がある。

(1) 授業研究会のスタイル

教科に関係なく、校長・教頭も含めた教職員全員が参加する付箋を用いたワークショップを取り入れている。授業前に、授業研究会のねらいなどをプリントで示し、観察する生徒の担当を決めている（授業観察では該当する生徒以外の観察も可）。これにより、参加者は目的意識をもって臨むことができる。生徒の学習状況の事実を、2色の付箋を用いて「学びが成立している点、参考になる点」「気になったこと、質問したいこと」に分けて記入している。

授業研究会において十分な協議を行えるよう、特別日課を組み、放課後に授業研究会の時間を確保している。

組織力の向上を図る校内研修の充実（県総合教育センター）より
付箋を用いたワークショップ（参加）型
授業研究会の進め方

- ①授業研究会のねらい、進め方等の確認
- ②授業者の反省と協議題の確認
- ③付箋の貼り出しと整理（時系列、観点別）
 - ・生徒の観察からの事実をメモした付箋を貼りながら、解釈や意見を出し合う。
 - ・貼り出された付箋を分類・整理する。
- ④全体協議
 - ・成果と課題を整理する。
 - ・重点課題を明確にする。
- ⑤重点課題解決に向けた方策について協議する。
- ⑥最善策の絞り込み

加蘇中学校資料より

◎このワークショップの利点

- ・教師の指導技術や授業の進め方などを直接議論するわけではないため、それらの話題も指導的・批判的になりづらく、授業者もそれを受け入れやすい。
- ・生徒の学びの様子から話題が進むので、話し合いを進めやすく、研修会が活性化しやすい。

(2) 変わり続ける授業研究会（①から②へ）

① 生徒を見る目を培う、基礎学力の定着（分かる授業をみんなでつくる）

ワークショップ導入当初は、授業におけるよりよい手立ては、生徒の学習状況を把握すること、つまり、生徒のわずかな反応や変容（表情や態度、つぶやき）を捉え、的確に解釈することから生まれると考え、授業研究会のねらいを「生徒を見る目を培う」こととした。このねらいであれば、教科の内容に関係なく誰もが授業研究会に参加できるので、付箋を用いたワークショップを軌道に乗せる上でも効果があった。回数を重ねるたびに、貼られる付箋の数は目に見えて増えていった。

加蘇中学校資料より

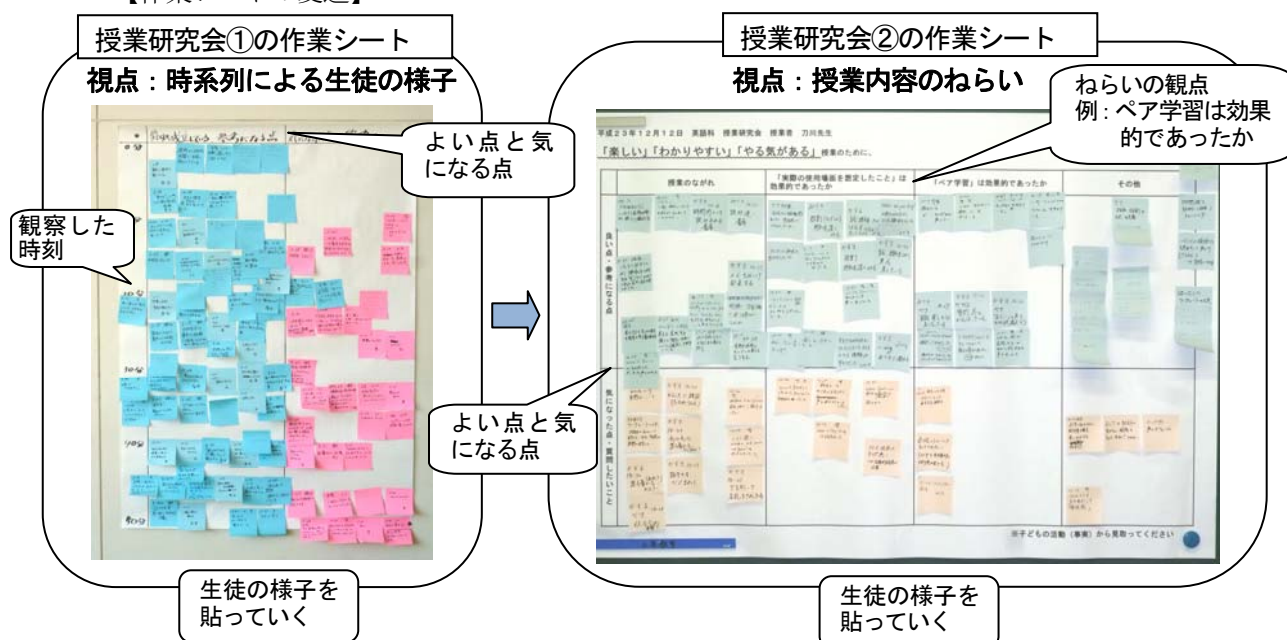
◎授業研究会のねらい（平成24年度）

授業における生徒の学習状況・変容をつぶさに記録することを通して生徒を見る目を培う。また、授業研究会では、そうした記録をもとに生徒の変容やつまずきなどの背景を話し合い、よりの確な生徒理解に努め、よりよい授業の在り方（具体的な手立てなど）について検討するとともに、教師一人一人の力量形成を図る。

② 「楽しい授業」「分かりやすい授業」「やる気がおこる授業」、自らの授業改善に向けて

平成 23 年度から、さらなる授業力の向上を目指して、①のねらいに加え、「楽しい」「分かりやすい」「やる気がおこる」ための手立てが有効に働いていたかという視点を加えた。付箋には、教師の手立てに対する生徒の様子が入力される。研究協議では、それらをもとに、手立ての有効性やポイント、問題点やその理由、改善策等について話し合う。また、研究協議のまとめでは、自身の授業改善に生かせることをまとめるようにして、各自が次の日の授業からでも実践できるようにしている。

【作業シートの変遷】



授業研究会の実施（②の②の事例）

平成 24 年 7 月 2 日（月） 1 年 1 組 13 名 理科「謎の物質 X の正体を調べよう」

◇授業のねらいと授業研究会の視点

「授業力向上」を目指し、ワークシートの工夫を試みている。具体的には、実験のねらいや実験方法を明記することで、生徒に目的意識をもたせ学習意欲を喚起できているか、実験のポイントを示すことで、生徒の理解が促進され基礎学力の定着につながっているかを見ている。

授業研究会では、生徒の取組の様子を通して分かりやすい授業となっているかが視点となる。

◇授業の様子

- ・ 班ごとに異なる実験が組まれていたが、意欲的に取り組んでいる。
- ・ 板書内容の記入や教師の問いかけに対する反応がよい。
- ・ 実験の結果（燃焼の様子、においなど）に対し、感じたことを自ら表現している。
- ・ ワークシート記入の相談や他の班員への助言など実験班員同士の協力が見られる。

◇授業研究会の様子

- ・ 参加者全員が意見を述べながら積極的に付箋を貼り出している。
- ・ 付箋をもとに他の授業での生徒の様子について情報交換がされている。
- ・ 小学校時代の様子も把握している。
- ・ 班の発表は、新しく着任した教師が行った。



〔教職員の振り返り〕

- ・生徒は前時のワークシートをよく見ていなかったの
で、見えるところに置いておくような工夫があると
よかったのではないかな。
- ・学習展開や目的などを考慮したよりよいワークシ
ートを作成したい。
- ・作業に入る前時の見通し学習の重要性に気付いた。
- ・学級における学業指導（話を聞く態度など）の充実
を図っていききたい。
- ・個人の学力（技能）形成とグループ活動との兼ね合
いを考えていききたい。

発表の様子



(3) 校内研修会（1学期）の実施

◇校内研修会の様子

研修では、はじめに「学校力」の向上に向けた本調査研究のねらいを確認した。その後、教職員一人一人が本校生徒の現状に対し、普段何気なく感じていることを顕在化し、意識を共有することを目的としたワークショップを行った。生徒の実態（よさや課題など）を出し合い、「こんな力をつけたい・こうなってほしい」という視点から、授業でできることや生徒との関わりについてまとめ発表し合った。

ワークショップでは、ほぼ全員の教職員が同じように生徒の実態を捉え、身に付けさせたい力においても類似した考えが出され、生徒理解の共有化が図られていると感じられた。

このような場を設けたことは、全教職員で学校の抱える課題やその改善への取組を考え、共有する上で効果的であった。

協議の様子



〔研修後の教職員の感想～振り返りカードから～〕

- ・各先生方が生徒一人一人の特色をよく見ている。よい面、課題となる点を見取り、それを改善する方法、または、さらに伸ばそうとする方策をきちんと考えてあげることがすばらしいことと思う。この教師の姿勢があるからこそ学校の生徒は生かされているものと思う。
- ・A、B班とも生徒を見ている部分がほぼ同じだという感じがもてた。こういう機会があると教員の考えがまとまるような気がするので、とてもよいことだと思った。いくつかの話をしながら教科の中でやってみようかというアイデアが浮かんできたので、2学期から実践してみたい。
- ・少人数の生徒をきめ細やかに見ていける環境が整っているので協力してやっていきたい。
- ・他の先生方が生徒について思っていることが分かりました。自分自身の生徒の見取りに偏りがあるのを感じます。もっと多面的に見るためには今日のような機会は大切だと思います。また、対策についても一人で考えるより皆で考え、他の先生方の意見を知ることさらに違った気づきや発見がありました。他の人の考えを知り、さらにまた、よいアイデアが浮かんだりもします。それらを共有して今後また新たな気持ちで生徒たちに接することができることをうれしく思います。
- ・理解しているようでも言葉に出して生徒の実態や改善点について話し合い、共有することで、自分がさらに気を配っていかなければならない点、見落とししていた点を確認することができました。

- ・グループに分かれて色々な角度から子どもたちの様子が改めて把握でき、課題になる点などに関しては改善策案がたくさん出たので、これからの指導の上で参考になるところがたくさんありました。

■ ワークショップ型の授業研究会を継続してきたことは、教職員の生徒を見る力の向上、各教職員が感じている生徒の課題や課題解決に向けた手立ての共有につながりました。また、授業研究会の当初のねらい「生徒を見る目を培う」に「手立てが有効に働いていたか」という視点を加えたことで、生徒の様子から授業内容や指導技術に関する話合いにもつながり、授業力向上への足掛かりにもなっています。これらのことは、生徒にこうなってほしいという願いや学校の課題改善の実践に反映されており、生徒たちを学力向上へと導いています。

2 「共有」から見えた課題の解決に向けた取組

授業研究会を通して、生徒たちの表現力に課題があることが見えてきた。自分の考えを適切に表現するには、まず、文章の内容や言われていることのポイントをつかむ必要がある。そこで、文章等を読み取る力の向上を目指し、読解力を強化する取組について、平成24年度の5月に校長から発案があった。各教科等の授業における読解力に重点を置いた指導に加えて、学校全体の取組として、5月中には朝の学習の時間に読解力を強化する時間が位置付けられ実践された。この取組には、新聞などに目を通すことで、世の中のことを知ること、大人向けの文章に触れるというねらいもある。

(1) 取組 「読解力を強化する時間」

(2) 内容

① 実施時間

毎週水曜日の朝の学習の時間

② 実施内容及び手順

準備：3～5分程度で読み終わるコラム程度の文章を教職員全員で準備する（当初は、校長が文章作成を担当した）。

手順：意味が分からない言葉を辞書で調べる。

文章を読み、内容を3行に要約する。

文章にタイトルをつける。

評価：担任が回収し、コメントをつけて生徒に返却する。その際、肯定的な言葉で褒める。

◇教師の振り返り

- ・読解力を強化する時間は軌道に乗り、生徒たちも短文でまとめるという活動に習熟してきたように感じる。

■ 生徒たちの表現力については、授業研究会の中で話題となっていたこともあり、教職員間で課題として共有ができていました。「この課題に対する手立てを講じたい」という教職員の考えを校長が受け止め、また、校長も取組に参加することで、教職員の理解が得られています。生徒を全教職員で育てるという本校の姿勢が、短期間で取組の実現につながっています。

3 教職員を対象とした「校長室だより～あさぎり～」の発行

「校長室だより～あさぎり～」には、校長の方針、「授業を大切にし、学力の向上を目指し創意工夫できる教師集団となるための理念や基本的な考え」などの教育的内容、日常の感想や趣味に関することまで、幅広い内容が書かれている。この「あさぎり」を通して、学校のリーダーである校長の組織観、学習指導観、生徒指導観、教師観などが示され、教職員は様々な示唆を得ている。また、校長の考えや思いの理解につながったり、職員室内で記載内容を話題に会話が交わされたりする場面が見られた。



- 校長は、校長室だよりを通して、自らの教育に関する考えをはじめ、様々な話題を教職員に提供しています。このことは、校長の考えや思いの理解につながるだけでなく、教職員間で話題となることで、コミュニケーション活性化の一助となっています。また、「読解力を強化する時間」が、校長室だよりを通して全教職員に提案されるなど、校長のリーダーシップを発揮する場もなっています。

4 各種アンケートの実施による状況把握

(1) 生徒の育ちを確認する調査 ～学習に関するアンケート～

本校では、学校の取組の有効性を確認したり、生徒の現状を捉えたりするために、定期的にアンケートを実施し、客観的データからも生徒の実態把握に努めている。

平成24年6月に1回目、11月に2回目を実施したが、いずれも全体的に高い数値であり良好な結果を得ている。ただし、母数が少ないので、全体の傾向を把握するというより、生徒一人一人の変容を見るデータのの一つとして活用している。学習指導・生徒指導には、個に応じた指導が重要であることが改めて確認でき、課題が見いだされた生徒に対しては、どのような手立てを講じたらよいか教職員間で何度も話題になった。

◇データを見る際に着目する生徒

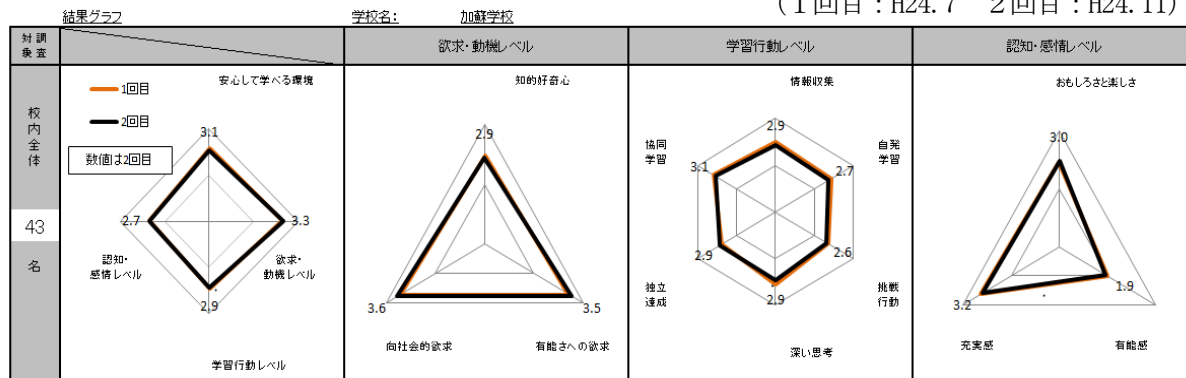
- ・ どの構成要素の数値も低い生徒
- ・ 全ての構成要素が満点の生徒
- ・ 構成要素によって差が大きい生徒
- ・ 教師の観察とアンケート結果の違いが大きい生徒

◇「学習に関するアンケート」で、県の平均値と比較して本校の数値が高かった要素

- ・安心して学べる環境
- ・有能さへの欲求
- ・向社会的欲求
- ・情報収集
- ・深い思考
- ・協同学習
- ・充実感

◇「学習に関するアンケート」の分析結果

(1回目：H24.7 2回目：H24.11)



(2) 組織マネジメントの視点からの教職員アンケート（平成23年度）

組織力の向上という視点から、協働体制、機能発揮などについて、教職員にアンケートを実施し、結果について考察を行った。おおむね良好な結果であったが課題もあり、課題に対しては改善策の具体案を提示している。

〔教職員アンケートの自由記述から〕

- ・校長室だよりの発行により、学校経営方針の考え方を定期的に理解する機会がある。
- ・分掌の枠を超えた発展的な改善策や具体的な方向性を確認することができ、学習指導や各種行事等の職務はスムーズに行うことができた。小規模校ならではの利点と思う。
- ・少人数ということもあり、穏やかな雰囲気の中、コミュニケーションがよくとれていた。
- ・普段気付かない生徒の実態を把握できたり、他の指導者の授業を通して生徒への言葉かけなどを学べたりした。
- ・生徒の様子について深く話し合うことができた。また、他教科について知ることができ自分の教科指導に役立つことがあることに気付いた。
- ・TTの指導の工夫の仕方やそこから気付いた生徒の様子等について、他の職員と共有できるとよい。
- ・会議や職員室でもっと多くの意見が出されてもよいと思う。

■ 生徒の実態や指導の取組の効果を把握するために、アンケートを実施しています。校内研修で生徒理解のために、「学習に関するアンケート」の結果を活用した際には、教職員が個人結果からその生徒を推測できている場面が見られ、普段からよく生徒の状態を観察しながら接していることがうかがえました。生徒一人一人に目を配って育てている教職員の姿勢が、「学習に関するアンケート」で「安心して学べる環境」の数値が高いという結果にも表れていると考えられます。

実践の手応え

[教職員の感想等～アンケート用紙から～]

- ・授業研究会を積み重ねていくうちに、意見を交換することへの抵抗感がとれていき、これを機に教職員間のコミュニケーションが図られ、こまめに情報交換したり、気軽に意見を求めたりするムードが高まった。
- ・学校全体で生徒全員を成長させていこうという雰囲気が出ている。
- ・授業から得た生徒の情報が教師間で話題になることが多くなった。
- ・職員と協力したり、相談したりしながら仕事に取り組めるようになった。
- ・小さなことでも職員と生徒について情報交換をするようになった。
- ・子どもに対する否定的な見方が少なくなっている。
- ・生徒同士で学び合っている姿が見られるようになった。
- ・学習に意欲的に取り組む生徒が多くなった。

学校の取組から

ワークショップ型の授業研究会を継続することは、教職員一人一人の多面的な生徒理解、授業力や指導力の向上につながるだけでなく、教職員間の雰囲気にも影響を与えました。授業研究会で生徒の様子や学習状況が話題になることで、日常においても生徒のよい面や生かせる場面を見つけることにもなり、学校全体が温かな雰囲気になってきています。このことは、生徒に安心感を与えています。また、研究協議の回数を重ねるにつれて、司会が進行しなくても付箋を貼りながら自然発生的に研究協議が始まり、活発に意見が交わされるようになりました。このような本校の雰囲気は、教職員のコミュニケーションの活性化や同僚性の向上につながる大きな効果であると考えられます。さらに、授業研究会では、教職員の視点を「生徒の見取り」から「手立ての有効性」に移すなどの改善が加えられました。試行錯誤しながら学校の実態に応じて取組を継続していくことが大切であり、そうした学校全体の取組が、「生徒の育ち」につながっています。

本校の授業研究会は、教職員の授業力向上のみならず、学校の組織力向上、生徒一人一人を大切に
する教育の維持・継承の役割も担っていると言えます。

活力ある教職員集団と地域との連携による学校づくり

足利市立山辺中学校

取組のポイント

- 全教職員が学校課題について共通理解を図り、互いの授業を自由に参観し意見交換を行い、生徒の学力の向上に努めています。
- 若手教員の育成のために、様々な場において活躍の場を設定したりベテラン教員による授業参観を実施したりしています。
- 地域の各小・中学校の教職員が、定期的な意見交換及び行事等の見学を通して小中連携を図っています。
- 学校支援地域本部や学校ボランティアによる学校教育への支援が行われています。

学校の概要



- ・生徒数 697 名 ※H24. 5. 1
- ・学級数 24
(普通学級 21 特別支援学級 3)
- ・職員数 57 名
- ・「前進山辺中」を合言葉に、生徒の一人一人が自らのより良き確かな成長（前進）を目指している。
- ・学校経営上の努力点の一つに「より開かれた学校づくりの推進」を掲げている。
- ・学校公開や行事等では、地域住民にも来校を呼びかけたり、職員や生徒が地域の諸活動に参加したりするなどの交流を推進している。

どの生徒からも「学校へ行きたい」という声が聞けるように、「子どもたち個々が、自分の持ち味を十二分に発揮でき、存在感や有用感、自信がもて、明るく楽しく、伸び伸びと過ごせる学びの場」を整え、「一人一人の確かな成長（前進）」を図っていくという強い思いを「前進山辺中」のスローガンに集約させ、教職員が一丸となって、日々の教育実践を着実に重ねている。

具体的には、「教えるべきことはしっかり教え、学ぶべきことは根気強く学ばせる」、「子どもの努力、頑張りを認め励まし、意欲や可能性、よさを最大限に引き出す」を念頭に置いて取り組んでいる。

学校経営方針及び努力点

- ① 創意ある学校経営の推進
- ② 学習指導の充実改善
- ③ 心を育む指導支援の充実
- ④ 教職員研修の充実
- ⑤ より開かれた学校づくりの推進



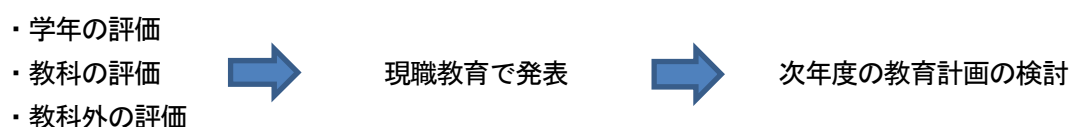
平成 23 年度・24 年度 学校課題

生徒一人一人(個々)のよさや可能性を生かす学校づくり
～自己実現に向けて励む生徒を支える教師を目指して～

実践内容

1 目指す方向の確認及び課題達成に向けた方策の共有化

(1) 学校評価による振り返りを生かした学校課題の設定



(2) 学校課題に対する教職員の共通理解

4月当初の職員会議で、学校課題及び学校課題の視点からの学力向上（学習）について共通理解を図った。その際に、「一人一人をひとりにしない」というキーワードを示した。

- 本校では、段階を踏みながら、学校評価を生かして次年度の取組の検討を行っています。こうした検討を重ねて設定された学校課題について、年度当初に共通理解が図られることが、全教職員の学校経営への参画意識の第一歩となります。教職員が同じベクトルで教育活動を行えるように、学校課題や方策を確認し共有することが重要です。

(3) 「学校力」の向上に関する研修（平成24年8月8日）

ワークショップ型授業研究会の提案

【「学校力」の向上に関する講話・ワークショップ】

研修課題

生徒の実態や学校課題について共通理解を図り、
取り組むべき課題を明確にする

学校課題に関する現状把握、今後の方策を、協議を通して確認する活動を行った。このことを定期的に行うことにより、教職員一人一人の指導力が向上し、「学校力」の向上につながることを伝えた。



「校内研修の振り返り」の記述から
〈研修を通して気付いたこと〉

- ・「目標とプロセスの共有が、教職員集団の力量を高める」という言葉が印象に残った。
- ・生徒の実態把握と教師間の共通理解こそが、教育活動の原点。そのためにいろいろと情報交換ができたことは、大変有意義であった。
- ・普段忙しさを理由に忘れがちな学校の教育目標を基にして、学校教育を常に行っていくことの大切さを改めて感じた。他の教員と情報を共有したり意見を交換したりして教育活動を行っていくことが、よりよい学校づくりには必要なのだと改めて感じた。



〈研修をどのように実践に生かしたいか〉

- ・学習面でも生活面でも現在できていることに満足・安心せずに、常に次の段階を考えて、目指す生徒像に近づくための関わりをしたい。
- ・生徒への声かけ、あいさつ、よかったところをほめるなど、コミュニケーションを積極的に図り、教師が生徒を認めていき、信頼関係を築いていきたい。
- ・今までやってきたことを継続し、さらに効果的に行っていきたい。同僚と話し合いの場を意図的にもったり、お互い協力し合ったりすることを進んでやっていきたい。

- 各教職員が、目標に向かって日々試行錯誤しながら教育活動を行っています。そうした中、自分の指導が目標の実現に向けて効果的であるか不安になることもあると思われます。そこで、有効な方策がとられているか協議したり報告したりする場を設け、出された方策について誰がいつまでに取り組むかを明確にすることが大切になります。

2 活発な話し合いを伴う校内研修を通じた授業改善

(1) 指導案検討会

◇話し合いの様子

平成24年9月に学級活動〔食育関連の学級活動(2)〕の授業について、第2学年による指導案検討会が行われた。

〈話し合いの様子の一部〉

授業者：ICTを活用した授業を行いたい。

参加者A：スライドの数がやや多いか。

参加者B：生徒の目がスライドに向きやすい。

参加者C：スライドの内容を紙で配布すれば、振り返りながら改善案を考えられる。

養護教諭：生活習慣病に触れているが、将来のことなので生徒は関心を示しにくい。貧血など、今子どもに起きていることを考えさせるのが大切。



- 参加者は、ICTを効果的に活用したいという授業者の思いを尊重しつつ、学級活動の趣旨（話し合い、身近な課題からスタート）を押さえることの重要性について述べていました。また、よりよい授業とするための改善策等、建設的な意見も多く聞かれました。授業者も、話し合いで出された意見を一部取り入れる方向で、展開の内容等を修正することとしました。こうした指導案検討会は、一人一人が「目指す授業」の具体的な姿を確認する場として重要になります。

(2) 授業研究会（第2学年 学級活動「体からのメッセージ」）（平成24年9月26日）

◇付箋を利用した授業の振り返り

会の冒頭に、対話が組織力を向上させること、積極的に対話を行いながら本時の授業の振り返りをするについて、司会者の説明があった。

グループでの話し合いでは、二つの観点（「A：学びが成立している点、参考になる点」、「B：気になったこと、授業者への質問など」）に区切られた模造紙に、一人ずつ参観中に記入した付箋を貼りながら説明が行われた。

◇授業者への質問や伝えたいことの発表

班ごとに、上記の二つの観点から発表があった。「参考になる点」、「気になる点」とともに、教師の指導法と生徒の様子両面について、数多くの忌憚のない意見が発表された。ある班は、スライドによる説明に目を向け、そのメリットとデメリットを整理して明快に説明していた。また、授業者への質問も多く出され、時間の関係でその全てについて回答できないほどであった。

この取組は、まだ始まったばかりではあるが、限られた時間の中で、発表の仕方を工夫するなど、授業観の共有や授業改善を目指し、授業研究会の在り方が随時見直されている。



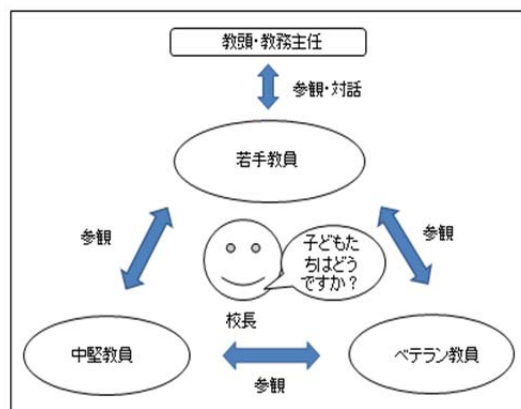
■ ワークショップ型授業研究会や指導案検討会において、教職員による忌憚のない意見交換が行われ、よりよい授業づくりや生徒の学力を伸ばしていく方法等を追究する姿勢が見られました。意見の内容も表面的なものではなく、「生徒をよくしていくにはどうすればよいか」といった前向きで建設的な意見が多く出されていました。

ここで見逃してならないのは、ワークショップ型授業研究会が始まってまだ2年目ということです。なぜ短期間で活気あふれる会となったのか。これには二つの要因が考えられます。一つ目は、日常的に教職員間のコミュニケーションが活発に行われるなど、人間関係が良好なことです。二つ目は、司会者が、授業研究会の目的を参加者に明確に示すとともに意見を述べることの重要性を強調していることです。

3 日常的な教員相互の授業参観を通じた授業改善

忙しい中、教科を越えて自由に参観し、自由に意見を交流するという取組が根付いている。授業参観後、協議の時間は特に位置付けず、休み時間等のわずかな時間を利用して一言アドバイスを行っている。

平成24年度は、若手教員に対する参観が多く行われた。1学期は教頭が、2学期は教務主任が定期的に参観し、参観後に適宜助言を行っている。



- 本校の若手教員の比率は比較的高くなっています。管理職やベテランの教員が若手教員の授業を参観し助言するとともに、若手も先輩教員の授業を参観し具体的な実践を間近に見ることにより、授業力の向上につながってきています。また、普段から、管理職が若手教員と積極的に対話を行い、安心して教育活動に臨める環境づくりを心掛けていることも見逃せません。授業研究会等でも、多くの班で若手教員が代表となり全体の場で発表する様子が見られました。教育活動の様々な場面で若手教員に活躍の場を与えることが、やる気や諸活動への参画意識を高めることは言うまでもありません。

総合教育センター等における校外での研修に加え、こうした校内における日常的な若手教員への支援が何より大切です。

4 子どもの成長を支えるための外部との連携

(1) 地域との連携

◇学校公開日の設定

基本的には、地域住民がいつでも学校を訪問し参観できるようになっている。また、年に9日ほど学校公開日を設定しており、校長自らが保護者や民生委員等に対して校内の案内を行うという取組が行われている。例えば、1年生の保護者に対しては、相談室の様子や特別支援教室などの学校の多様な機能を紹介している。また、1年生と3年生の教室を案内し、それぞれの発達の段階における特徴や生徒の成長を実感してもらうようにしている。校内を回った後には、学校側と保護者、または保護者同士の情報交換の場として校長室を開放している。

前年度末の振り返り（反省）を踏まえ、学校公開日に小学校の保護者に来てもらうことを現在検討している。

◇学校支援地域本部による「早寝早起き朝ごはん・読書」の推進

- ・脳科学者による講演会の実施（対象：生徒、保護者、地域住民）
「早寝早起き朝ごはん・読書」の脳への影響について
- ・朝の読書への学校ボランティアの支援
図書室整備、おすすめの本の紹介、図書室壁面の装飾 等
- ・親学習プログラムの実施
(10月：足利市幼保小中学校人権研修会)

外部の方々と生徒が協働して学習環境を整備したことで、図書室の使い方がより丁寧になりました。

◇学校ボランティアによる「図書室大改造」

足利市生涯学習課の学校ボランティアリストなどから、図書室改造ボランティア（約30名）を新規に募集し、夏休みに図書室の手作りリフォームを実施した。外壁については2年生がマイチャレンジ活動で塗装した。



◇文化祭での地域との交流

平成24年度は、「かがやけ笑顔、地域に感謝 みんなでつながれ山辺中」のテーマで3年に一度の文化祭が開催された。学級ごとに、生徒が協力して自分が住んでいる地域を調査した成果を展示した。中には、地元の八幡太鼓とソーラン節を発表した学級もあった。この学級の担任は、準備の段階で夜間等に地域の人々から太鼓を習い、それを生徒に伝えていくという取組を行った。本文化祭は、普段からの地域との連携を改めて確認する機会となった。

◇情報発信 ～「学校だより 前進山辺中V」の発行～

校長が、学校の教育活動や活動における生徒のよさやがんばりを保護者に定期的に発信している。学校公開に加えてこうした情報を提供することが、保護者の子ども理解の一助となり、ひいては学校に対する協力的な姿勢につながっている。

■ 学校と地域が連携して生徒を育成している取組が随所に見られます。ここでの「連携」は、「互いを知ること」、「コミュニケーションを図ること」と捉えることができます。管理職をはじめとした教職員が地域の中へ積極的に入っていくことを通して、学校が地域を知るとともに地域も学校を知ることになります。学校と地域が接する中でコミュニケーションを図り、同じ方向性をもって共に生徒を育てていこうという体制が長年に渡って培われてきました。こうした本校の取組から「連携」の本質的な在り方を学ぶことができます。

(2) 小学校との連携

◇教職員同士の連携

年に数回、若手教員が中心となって学区内の小学校を訪問し、授業中の教師と児童との関わりや掲示物等の学習環境等を見学している。また、学力向上の研究指定校である山辺小の取組を参観し、小学校との連続性や教科の系統性を意識した学習指導に生かそうとしている。

管理職同士の交流も活発で、山辺中学校区内の小・中学校の校長は毎月、教頭は隔月でミーティングを開き、情報交換を行っている。また、各小・中学校で行事等がある際には、教職員の誰かが可能な限り参加している。

5 子どもの育ちを確認する生徒アンケートの実施

1、2学期末に、学習指導係が担当となり、質問紙形式による自己評価（「授業の5つの目標」生徒の実態調査）を行い、集計結果を次学期に教職員へ周知し、その後の指導に生かすようにしている。

数値に大きな変化は見られないが、教職員からの評価だけでなく、生徒の自己評価を踏まえた指導も重視している。

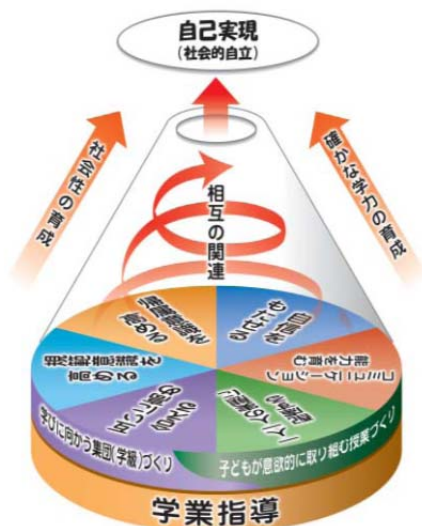
例えば、24年度1学期末に実施した調査においても、全体としては大きな変化はなかった。しかし、2年生については1、3年より低い傾向が見られた。教職員からはそう悪く見えないにもかかわらず、生徒の自己評価は低くなっている。この教職員と生徒の見方のずれに着目し、その後の指導に生かしている。

「授業の5つの目標」

- ①チャイム着席ができています。
- ②授業の礼はしっかりできています。
- ③指名されたら「はい」という返事ができています。
- ④発表は大きな声でできています。
- ⑤先生や生徒の話を真剣に聞くことができています。

- 地域内の小学校においてもほぼ同じ目標が設けられており、小中一貫した取組となっています。小学校と中学校の指導の方向がそろうことにより、教育活動を効果的に行うことができます。

【Column】学業指導について



本県では、学業指導を推進しています。

学業指導とは、それぞれの学級を「学びに向かう集団」に高めながら、児童生徒一人一人が自らの力で様々な不適応を解消し社会性を身に付けたり、意欲的に学習活動に取り組んで学力を向上させたりして自己実現（社会的自立）を図っていくための指導・援助のことです。

これは、「集団の中で学ぶ」という学校教育の特質を生かして、児童生徒一人一人を成長させるという考え方に立つものです。左のイメージ図に示したとおり、学業指導を推進するには、「学びに向かう集団づくり」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」の両側面から取り組み、相互の関連を図ることが大切です。

「学業指導の充実に向けてー学業指導を全ての教職員が進めるためにー」

栃木県教育委員会 平成24年3月

実践の手応え

[教職員の感想等～アンケート用紙から～]

- ・職員室内で、年齢や経験を問わずいろいろな話ができる。子どもや教育についてだけでなく、プライベートの話まで、普段からよく話しているの、授業研究会の時も遠慮なく意見が言える。
- ・常にさまざまな授業に出入りができる環境になっているので、気軽にいろいろな先生方の授業を見に行くことができる。そこから授業力の向上につなげられる。
- ・「一人で何とかしなくては」と思わなくなりました。
- ・細かいことも情報交換し、常に職員が同じ方向で指導にあたれるように学年会等で話し合いを密に行ってきた。
- ・「〇〇先生がこんな風にほめていたよ」などと、生徒とのさりげない会話の中で話をすると、生徒も喜ぶしよい方向に向いてくる。職員の和が生徒の和につながっていくように思います。
- ・何か事にあたろうとすることに対して教職員一人一人の結束力がとても強いと思います。
- ・教職員一人で授業に対応するよりも、組織として取り組む意識をもちはじめている。
- ・若手の教員が主体的に研修や話し合いに参加できるようになってきた。
- ・管理職が寛大な気持ちで見守ってくれ、失敗やトラブルに対して前面に出てフォローしてくれる。
- ・教師間で学習指導の話題について遠慮なく言えるようになってきた。
- ・今は何の学習をしていて次は何を学ぶのかを自覚できるようになってきた生徒が見られる。

学校の間組から

話し合いの場での教職員の活気は、学校での教育活動全般に通じており、教職員の元気が生徒の元気に反映しています。全体やグループの話し合いで本音の意見を積極的に発表するといった授業中の主体的な学習態度がその表れといえます。管理職が常に元気で、教職員の実践を温かく見守り受容することが、教職員の元気とやる気につながり、ひいては生徒の元気と主体性となって見えてきています。教職員の活気とまとまりが、生徒の姿勢にも好影響を与えている事例といえます。

日常的な対話と校内研修での話し合いも、教職員間のコミュニケーションの活性化に寄与しています。中学校は、行事の準備、委員会活動、部活動指導等で放課後時間を生み出すことが難しいのが現状です。加えて、本校は大規模校ということもあり、計画的に校内研修を設定しづらいという実態があります。そうした状況の中、生徒の様子について情報交換をしたり授業を互いに見合ったりするなど、日常的な対話を通して生徒理解や授業力を高めてきました。一方では、対話の相手が限られるということもあって、自分のやり方がよいのか不安に思う教職員もいます。それを補ったのが校内研修等での協議といえます。この二つをバランスよく取り入れていくことが、「方策」や「実践」の共有に有効であると考えられます。

教職員の組織的な教育力をバックアップする地域の教育力も見逃せません。学校と地域がよきパートナーとして共に生徒を育てる体制を構築するために、学校公開や情報の提供といった方策を地道に積み重ねる本校の間組は、他の学校においても大いに参考になると思われます。